国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM

◎特　集　第７回世界青年の船
●講　演　シャプラニールでの経験（下沢　嶽）

マクロコズム '95.7

vol. 5

㈶青少年国際交流推進センター

第７回世界青年の船

“Passage for Progress”

ジャパン・フード・フェスティバルで日本の食文化を紹介（にっぽん丸デッキ）

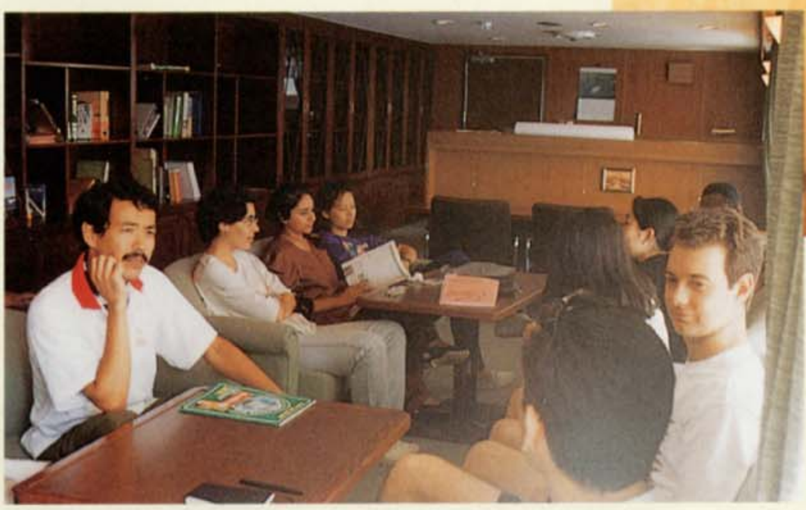
東京	～ブリスベーン	～スヴァ	～パペーテ	～グアヤキル	～アカプルコ	～ホノルル	～東京
日本	オーストラリア	フィジー	タヒチ	エクアドル	メキシコ	アメリカ	日本

世界青年の船は、北・中・南米方面と南西アジア・アフリカ等方面を隔年で訪問しています。第７回は前者のコースでした。外国青年は、１月10日に来日して日本でのプログラムを体験した後、出発前研修で日本青年と合流しました。１月19日、「にっぽん丸」は、日本と訪問地である４か国を含む13か国の青年約300名を乗せて東京港を出発し、船内では、講義、ディスカッション、グループ活動等が行われました。各寄港地では、表敬訪問、施設見学、交流活動等が実施されました。

外国青年は、修了証を授与されアカプルコ、ホノルルと順番に下船していき、最後の寄港地ホノルルからは日本青年のみとなり、事後活動について討議される場となりました。第７回世界青年の船は、３月20日帰航し全プログラムを終了しました。

◀地方旅行での歓迎会（青森県）
1月10日に来日した外国青年は、総務庁長官表敬課題別視察、地方旅行でのホームステイ、出航前研修等のプログラムを体験し、1月19日に第7回世界青年の船に乗船して晴海を出航した。

松尾団長の講話▶
船内では、団長講話を始め様々な分野の講義が行われ、セミナーや研究協議の場が数多く開催される。



▲ディスカッション風景
船内では、いたるところでディスカッションをする青年の姿がみられる。日刊紙 Daily Wave の編集のために熱心に討議している青年達

船内では、スポーツや文化の様々なクラブが行われている。
▼柔道クラブの練習風景

◀カーニバル王＆王女！
リオのカーニバル開催日に、ブラジルのメンバー主催の船上カーニバル大会が行われた。

▼エクアドルでの表敬訪問

▶エクアドル（グアヤキル）
ロトンダ広場における到着歓迎式の様子

オーストラリアのガットンカレッジ（大学）で
▼ファームステイの翌朝、乳絞りの体験

船内でのナショナルプレゼン
▼テーション・デイ（メキシコ）

「世界青年の船」で学んだこと

―― 真の国際理解は個人間の相互理解から ――

中　島　利恵子
（第７回世界青年の船参加青年）

近年、「国際理解」「国際化」などという言葉が頻繁に聞かれるようになっている。しかし、本当の意味で、これらの言葉を理解している人が果たしてどのくらいいるだろうか。私は、真の国際理解、国際人とは何であろうかと自分なりの答えを求めていた。「世界青年の船」に参加した一番の収穫は、この問題への一つの大切なヒントを得たことである。

「世界中の若者たちとの交流を深めて、様々な価値観に触れてみたい。」こんな思いを胸に、私は「にっぽん丸」に乗り込み晴海埠頭を後にした。しかし、13か国もの異なった文化を持つ国からの若者たちが参加し、中には地図帳や本の中でしか知ることのなかった国の参加者もいるのに、お互いを理解していけるのだろうかという不安もいっぱいだった。

あるとき、ニュー・ジーランドとメキシコから参加しているルームメイトと私は、自分たちがいかに「固定観念」に縛られていたかを語り合う機会があった。彼女たちは私に、口を揃えて自分たちが持っていた日本人に対する一種の固定観念が私と生活することにより打ち破られたと語った。私も彼女たちに対して全く同じことを感じていた。私と生活を始める前には、彼女たちの中には、

▲松尾団長から一人一人修了証を授与される

主な内容

第７回世界青年の船 …………………… 5〜6
「世界青年の船」で学んだこと
シャプラニールでの経験 ……………… 7〜11
――国際協力の在り方――
英国チャリティショップ事情 ……… 12〜13
モザンビーク選挙監視派遣団の体験 … 14〜16
阪神・淡路大震災ボランティア活動報告 …… 17
兵庫県インドネシア青年受入れ ………… 18
人物紹介 …………………………………… 19
お知らせコーナー ………………………… 20

〈表紙の説明〉
タイ・９才の
Nicha Rukpanichmani さんの
「私の家族」
アジアのこども絵画展より
入賞作品

「おとなしくて、整理整頓好き」という日本人の女性像が出来上がっていたという。結局、自分たちが持っているある国への固定観念をなくすには、その国の人々と実際に触れ合い、個人を知ることから始めなければいけない、という結論に達したのである。

船上で生活を初めて1か月経つ頃には、「にっぽん丸」はまさにボーダーレスの世界と化していたように強く感じた。そこには、国対国、異文化対異文化ではなく、個人対個人という交流が存在していた。もちろん、自国や他国の文化を理解することも重要だとは思うが、大切なのはお互いに個人レベルで理解しあうことなのだと気づいたのである。

かつて私は、「国際理解」などというと非常に難しいことのように感じていた。しかし、世界船での経験によって、それは実は想像しているよりも簡単なことなのかもしれないと感じるようになった。真の国際理解の第一歩は、個人間の相互理解から始まるのではないだろうか。

世界船のプログラムを終了してから、早くも2か月が経とうとしている。日々の生活の忙しさの中で、世界船の様々な出来事は私の心の中で完全に過ぎ去った「思い出」になりつつある。しかし、一方でその経験から学んだことは私の中で明らかに血となり肉となっていると強く感じる。私が世界船に乗らなかったなら、今の自分はなかったといっても過言ではないだろう。この経験は、これからも様々な意味で私の人生に影響を与えていくと思う。今、私は、こんなすばらしい経験をさせてくださった総務庁及び管理部の方々、そして日本を含め世界中の多くの仲間に感謝の気持ちで一杯である。

▲ナショナル・プレゼンテーションデーにメキシコの青年とともに（筆者 中央）

シャプラニールでの経験
── 国際協力の在り方 ──

下　沢　　　嶽

私の話は、できるだけ具体的に、現地で体験したことを織りまぜて、皆さんにメッセージをお伝えしたいと思っています。

私は、今、シャプラニール（市民による海外協力の会）という日本のＮＧＯで働いています。シャプラニールというのは、ベンガル語で白蓮の家という意味です。これは、22年前にバングラデシュが生まれて間もない頃、日本人の青年がバングラデシュの農村に住み込んで、農村をよくしていこう、農村開発をしていこうということで始めた時、村人が付けてくれた名前です。今、日本人のスタッフが14名、現地では約70名のスタッフが働いています。

私がバングラデシュに行くことになりましたのは、1988年から1993年、ちょうどバングラデシュで大きなサイクロンの被害があった時期です。その時の４年８か月の中で学んだ幾つかのエピソードを皆さんに聞いていただければと思います。

シャプラニールの仕事

小さな町で育った平凡な一青年だった私は、20歳の時にインド旅行をし、強烈な印象を受けた。その後イギリスに渡って、１年間身体障害者の施設でボランティアとして働きました。帰国して地域のボランティア活動を推進するボランティアセンターで仕事を得、30歳になった時、シャプラニールの誘いがあって、バングラデシュに行くことになりました。人口の５割から６割に当たる土地を持たない農民を集めて、ショミティと呼ばれる相互扶助グループを作るのが、シャプラニールでの仕事でした。村のほとんどの人々は、小学校に行ったこともなく、約８割の人は字が読めず、保健衛生や予防注射の知識もありません。このような村で、乳児死亡率を下げ、予防注射を普及させ、保健衛生の知識を広げるにはどうしたらいいか、ミーティングの時に問題を投げかけたところ、医者の免許を持っているバングラデシュ人の若いスタッフが、クリニック（小さな小屋を建て、医者を常駐させ、貧しい人達にはできるだけ安く、もしくは無料で治療をする）を作ったらどうだろうかという提案をしました。

このやり方が本当にいいのだろうかと疑問に思い、結核の予防対策及び治療の専門家として現地に派遣され、バングラデシュに七年近く住んでいる日本人の医者に相談に乗ってもらうことにしました。「実は、クリニックを建てたいという意見がありますが、どう思いますか。農村ではこれでいいんでしょうか。」という問いに対して、そのお医者さんは、二つの例を話してくれ、同時に現場を見せてくれました。

あるソーシャルワーカーのこころみ

「下沢君、ここが首都ダッカに外国の援助でできた病院で、毎年何千人もの結核の患者が来る。ところで、ここに100人の結核に感染した患者が来たとする。そのうち何人が治療を了えると思いますか。」

今は、結核というのは薬を飲めば治る病気です。ただ、投薬の期間が半年から1年かかり、その後もレントゲンを撮ってチェックし続けなければなりませんから、約2年ぐらいのフォローアップが必要です。

「下沢君、たったの4人なんだよ。それは何故だと思いますか。結核の患者の多くというのは、ダッカの中ではスラム、農村では貧しい人なんだ。彼らがこの病院までやって来て、1年間通い続けられると思いますか。何故その病気に罹ったのかということも知らされず、バスに揺られて病院に来てお医者さんに会っても、ほんの1分か2分で次の患者さんに替わっていく。待ち時間が3時間の時も4時間の時もある。こういうことで、村の人達が来るだろうか。」

そして、次に、「実は、95パーセントの治癒率を達成した小さな団体があるんだ。つまり、病院では、3〜4パーセントなのに、小さな村のNGOが95パーセントも治している。」

「そこはどこですか、教えて下さい」と言ったら、彼は小さなトタンでできたクリニックに連れて行ってくれました。

そこには、バングラデシュ人で結核予防及び治療をしているソーシャルワーカーがいました。その人は、日に焼けて、痩せていて、まるで村の中学校の素朴な先生といった感じで、とてもお医者さんとは思えない人でした。彼が、トタンと竹でできた小さな小屋に机を一つだけ置いてやっていたんです。

100タカの治療費

この人がどうやって95パーセントを達成したのか、その秘密はこうだったんです。村人がやって来て、結核に罹っていると分かると、そのことをまず知らせる。結核というのは、痛くない。ただ、疲れるとか、ぜいぜいするとか、そういう症状があるだけだが、この病気がどのように体を蝕んでいき、死に至るかということを説明する。

そして「あんたは、ほんとに治したいか。」と聞く。最初どの患者も治したいと言う。「分かった。治したいならば、あなたここで100タカ出しなさい。」100タカというと村の3日か4日分ぐらいの賃金です。そうすると、患者は、とてもそんなお金はない。今日のご飯も食べられなかったんだと言う。「分かった。では、もうあなたは治さなくていい。」とはっきり断る。患者はやはり怖い。治したい。一所懸命工面して100タカ彼に預けます。彼はこう言うんです。「あなたが全部病気を治したら、このお金はプレゼントとしてあなたに返しましょう。」たったこれだけだったんです。

こうして、彼が95パーセント、100人来たうち95人を治している。こうした簡単なことで、巨大な援助と専門家が行ってできなかったことが、村の素朴なソーシャルワーカーにできたということが、私にはものすごく大きな発見だったんです。

お金を農民から取る。農民にとっては100タカ

というのは簡単に出せるお金ではありません。かなり苦労して頑張ろうという気持ちがないと出せないお金なんです。それを敢えて取ることによって、彼は農民から何を引き出したのか。これが一番目の例です。

ヘルスボランティアの役割

次に、二番目の例。これも私は大変驚きました。その日本人のお医者さんが「下沢君、では、違う村に行ってみないか。バングラデシュには5千人に一人の医者しかいない。医者は村に住みたくないんだよね。彼らはエリートの家庭に育って、苦労して学校を出て、医者の免許をとる。最低限の収入と地位と、そういうものを保障されたいと思うのは当然だろう。だから、村に住んで貧しいお百姓さんのことを考えて働くお医者さんというのは実に少ないんだ。また、行っても、お金がないと、場合によっては断られたり、ほんとに1分か2分の問診で終わってしまう。そういう所の村には病気が蔓延している。一番多いのが下痢からくる赤痢、出産時のいろんな感染症、回虫、予防注射を受けないことによる伝染病、ポリオ、破傷風、結核、そういうものの発生率が大変高い。」彼は、こう言ったんです。

「医者なんかなくてもいいんだ。いなければしょうがないじゃないか。」

「じゃ、どういうプロジェクトをそこではやっているんですか」と聞くと、「村のおばさんに医者になってもらうんだ。」「村のおばさんというのは、さっき言った、土地を持たないお百姓さんの奥さんですね。字も読めない、サービスを受ける側じゃないですか。どうして彼らが医者になれるんですか」と聞くと、「下沢君、村で発生する病気の7割は予防の段階で防げるものばかりなんだ。そういったものは、発生源を止めないかぎりは、いくら治療しても、それこそ何十年やっても、きっと変わらないよ。それは、単なるチャリティであって、積み上がっていく本当の開発ではない。持続力はないんだ。まず予防するためには何がいいかということから考えなければだめなんだ。」「分かりました。確かに理屈はそのとうりです。ただ、字の読めないおばさんにどうやってそれをやらせるんですか」と聞いたら、私をそのおばさんたち（ヘルスボランティアと彼は呼んでいます）の所に連れて行ったんですね。

「村のおばさん達は、字は読めないけれど、村に住んでいるから、今日は誰の顔色が悪いとか、彼はここ3日ぐらい熱が続いていたとか、状況を毎日見に行ってあげられる。今日元気？食べられた？その後どう？そういったことは近くにいるからできる。こんないい医者はいないんだ。」

病気の対応方法を丸暗記

彼はそのおばさんと会うと「やあ」と言って「今日は患者さん来た？昨日はどうだった？」という話から始まって、「じゃおばさん、今日新しい日本人が来ているから、下痢の症状の見分け方をちょっと教えてあげてよ」と言うと……赤痢の時の下痢はこういう症状、コレラのときはこうなる、回虫の場合はこういう症状が必ず出る……。そのおばさんは、村でよくある病気の対応を全部丸暗記しているんですね。勿論、彼女にできないことがありますが、ここから先は本当の免許を持ったお医者さんでなければできないということを知っ

ている。つまり、3日間経って治らなくて血便が出た場合はお医者さんに連絡をとる。そういった対応マニュアルを彼女は全部暗記していて、しかも、それを体験的に村の中で実践することで、見事にその役割を担っていた。

同じようなおばさんたちが保健ボランティアとしてその地域で300名ぐらい活躍していて、NGOが中央の本部に医者を一人だけ置いて、何かあったらそこに報告するという形で地域全体の保健衛生の予防対策ネットワークを作っていた。

能力を引き出す役割

この二つが、私にとって大きなヒントになりました。つまり、私たちは、村の人達とか対象となる人達が持っている力、知識、能力、潜在的可能性というものを、どちらかというと全部0に置き換えて、こちらからインプットできるものばかりを先に考えてしまう。私たちが、お金を持っている、技術を持っているという立場から、ついそういう見方をしてしまう。そうではなくて、彼らが持っているものをどうやったら引き出せるかということを、常に考えることが私たちの役割だったんだということに……ほんとに分かりやすい、素朴なことだったんですが……村に入って、その事例を見せてもらって、気がついた。

貯金の勧め

そこで、シャプラニールは何をしているかというと……まず組合を作ってもらうと、初めに貯金をしてもらうんです。つまり、外国人が来て、何か援助してくれるとなれば、当然村人はいろんな期待をしますが、私たちは、最初何のインプットもしません。インセンティブは一切出さない。

皆に集まってもらって「この村の問題は何ですか」と聞くと、皆、いろんなものが無い、橋が無い、学校が無い、クリニックが無い、医者がいないということを言います。「分かりました。では、あなたたちにできることは何でしょうか」「ぼくらには力がない、知識もない、何もできない」「分かりました。けれども、何かしたことがありますか」「私たちは、農業以外は分からない。昔のやりかたしか分からない」「じゃあ、皆一度貯金をしてみませんか。何か病気になったときとか、ほんとに困ったとき貯金があるとすごく助かります」「食事もできない日もあるのに、どうやって貯金をしたらいいんだ」「皆さん、たばこを吸ったり、お茶を飲んだり、無駄なことにも多少使っているんじゃないでしょうか。そこのお金を一部でもいいから貯金に回して見ませんか。今日からでもいいから、たばこを半分に減らしましょうよ。女性は、ご飯を作るときにお米を一握りだけ違うざるによけておいたらどうですか。1か月も経つとずいぶんたまってきますから、そのお米をマーケットで売って貯金に回しませんか」

最初、皆、できないと言いますが、必ず、中のリーダー何人かが、やってみようかという話になります。そうすると、実はできるんです。その貯金を元に2年間ぐらい経ちますと、ものすごい大きいお金になってきます。その貯金を元手に、われわれワーカーが、これをビジネスに投資したらどうかというふうに、いろんな動機づけをします。彼らは、牛を飼ったり、お米をストックしておいて値段の上がったとき放出するとか、そういったビジネスをするように、だんだん変わっていきます。

収入向上もそうですし、保健衛生の問題もそうですし、教育の問題もそうですが、相手の持っている潜在的な能力をどう引き出すか、どう信頼して彼らの力を引き出していくか、また、それが出てくるのをどのような方法で保障するかということが、発想の根本になければならない。このことを、向こうの活動の中で学ぶことができました。

二つのメッセージ

私は、日本に帰ってきて、皆さんに「じゃ、私たちにできることは何ですか」と、よく質問されます。私は運良く外国に行って、そういう仕事ができましたけれども、誰もが私のように海外に出掛けていって働くことが本来ではないし、むしろそれは特殊な仕事だと思います。様々な、今いる場所でできることをしていくしかありません。そこで、私は今二つのことを考えています。

① 知ること、伝えること

一番目に、南北問題、貧しさのあることを、知るということ。ただ貧しい人がいるということではなく、どういうふうに貧しいのか、何故そうなってしまったのか、そして彼らがほんとにやりたいことは何かということを、知るということ。このことが、ものすごく足りない。私が現場に行って初めて知ったことからも分かるとおり、知るということがまず第一。そして、その知ったことを、もっと皆に伝えていくことが、海外に行かない人達にもできることではないかと思います。

② 大量消費の生活を見直すこと

二つ目は、これも先進国の人達、特に日本の人達に言えることだと思うんですが、今の私たちの、この大量消費の生活を、もう少し、自分の今いるこの地点から、直していけないか、変えていけないか。もう少しそれを自然な形でできないか。このことが、すごく大事だと思いました。バングラデシュの生活は大変厳しいものもありましたが、自然の流れの中で理にかなった部分も沢山ありました。そして、私が日本に戻るといつも思うのは、溢れる物に囲まれた私たちの生活です。この資源の多くは、第三世界の国々からこの国に送られてきています。これをどうやったら変えていけるのか。昔の生活に戻るということではなく、もう少し自然で、必要なものだけで暮らす、こういったことができないかと思います。この視点で、私たちは、日常生活でまだできることが沢山残っているのではないかと思います。

この二つを皆さんへのメッセージとして伝えたいと思います。どうもありがとうございました。

（この原稿は、平成6年7月11日に行われた国際青年交流会議における下沢嶽氏の基調報告を要約したものです。）

シャプラニール事務所
〒169　東京都新宿区西早稲田2－3－1
早稲田奉仕園
TEL　03-3202-7863　FAX　03-3202-4593

英国チャリティーショップ事情

一粒で二度役立つ‥リサイクルから援助活動へ

椿　　景子
（第２回世界青年の船参加青年）

チャリティーショップとは？

英国の街、特に住宅地を歩いていると、何件ものチャリティーショップが目につく。私は、ロンドン北部に住んでいたが、500メートル位の商店街の中に、３件のショップがあった。「Red Cross（赤十字）」や「Save the Children」、「ルーマニア援助の会」など、実に様々な団体が、このチャリティーショップを運営している。

細かい運営方針は、各団体独自のものがあるとは思うが、チャリティーショップそのものの機能としては、大きく三つあげられる。まず、衣類を中心とした市民の不要物を回収すること。次に、その不要物をリサイクルして、店内で販売すること。そして、その売上を活動資金として、発展途上国に対しての援助活動を行うことである。

チャリティーショップの老舗―OXFAMの活動

このような活動を行う団体は数多くあると既に述べたが、その中でも規模的には恐らく英国一と思われるOXFAMの活動についてとりあげてみよう。

OXFAMの設立は、1942年に遡る。当時ギリシャでは、ナチスの迫害によって、多くの市民、特に子供たちが悲惨な状況下に置かれており、英国政府に対して食料提供の要請がでていた。その現状を知ったオックスフォードのある市民グループは、政府が行動を起こすより前に援助活動をはじめ、迅速な対応を行っていた。この団体こそがOxford for Committee for Famine Relief（OXFAM）である。

今日でも、OXFAMは緊急援助を中心に、貧困に苦しむ人々に援助の手を差し伸べている。加えて、途上国に住む人の自主的な発展を援助をする活動にも力を入れ、住民が作った穀物の貯蔵庫や、農産物の種や苗などの支給も行っている。さらには、政府や国連などに現状を説明し、理解を深めるための圧力団体としての役割をも果たしている。

数字で見る OXFAM

現在 OXFAM は、英国内外に 40 か所以上の事務所をもち、70 か国以上で活動を行っている。職員数は 1,153 人（1990 年現在）、チャリティーショップは、836 か所あり、27,000 人のボランティアが活動に参加している。

OXFAM の活動資金は、40％が寄付金、30％がチャリティーショップからの売上げ、その他が ODA や EU からの補助金でまかなわれている。支出としては、80％近くが援助資金として使われ、その他がチャリティーショップの維持費や職員の人件費になっている。

私の OXFAM ボランティア体験記

私は、1994 年 4 月〜12 月まで、ロンドン北部に在住しており、半年ほどこの OXFAM で週一回のボランティアとしてお世話になった。短い期間ではあったが、いろいろ感心させられることの多い体験だった。

まず、何よりもこのチャリティーショップが地域にしっかり根づいているのが、印象的だった。毎日のように不要品が山のように持ち込まれ、平均 1 日約 4 〜 5 万円の売上がある。1 点につき、300 円〜2,000 円程度のものが多い中、これだけの売上があるということは、かなり利用する人がいるわけである。実際、どのチャリティーショップも、普通の店と変わらない感覚で利用する人が多く、親戚の子供のプレゼントとして、ぬいぐるみを買って行く人もいた。

また、このチャリティーショップが、全てボランティアで運営されているのも驚きである。地域ごとには、OXFAM 職員が責任者という立場で存在しているが、品物の仕分けをはじめ、販売、経理にいたるまで個々のショップの運営は全てボランティアに任されている。主として、家族の手がかからない中高年の女性が多いわけだが、このような女性のマンパワーをうまく利用した、見事な運営方法である。

紙面の関係上、今回はここまでに留めておくが、機会があればより具体的な作業内容についてご紹介したい。OXFAM のチャリティーショップが日本でも関西方面で開設されるという噂を耳にしたことがあるが、リサイクル活動が活発化してきていることからも、時代の流れに適した活動といえるだろう。リサイクルだけに終わらず、その資金が開発援助につながるという「一粒で二度役立つ援助」の形がこの国でも定着することを期待している。

▼店内の様子　　人物は、ボランタリィ・スタッフ

モザンビーク選挙監視派遣団の体験

── 民間人としてPKOに参加して ──

古　谷　千　秋

国連のチャーター機が高度を下げて雲に突入し、次の瞬間、眼下にモザンビークの大地が広がりました。想像していたような赤茶けた不毛の地などではなく、濃緑、黄緑、黄色など、微妙に色彩の異なる小さな畑が並んでいました。畑の輪郭はいびつな形をしていますが、よく見ると畝はきちんと整い、人々の勤勉さがうかがえます。コール天の余り布をパッチワークしたようにも見えました。

空港に迎えにきてくれたのは、日本の自衛隊の人々でした。彼らは輸送調整の任務にあたり、もともと日本人に適した業務である上に勤勉さも加わり、他の国の人々の評判もなかなか良いようです。

入国手続きを済ませると、再びチャーター機に乗り込み、約30分でザンベジアの州都ケリマネに到着しました。ベイラとはまったく異なる荒れ果てた土地。長年の内戦の跡がありありと残っていました。

■　荒廃のザンベジアへ

到着後のブリーフィングで渡された歓迎の手紙に「最も荒廃した地ザンベジアへようこそ。苛酷な環境の下で働く覚悟でいらっしゃったあなた方の期待を裏切ることはないでしょう」とあり、一気に緊張感が高まりました。

ザンベジア州の現状について説明を受けたのち、

▲各国の団員とともに投票所へ出発（筆者 左端）

それぞれ割り当てられた宿泊地へと向かいました。あまり多くの人が訪れることのないケリマネ。当然のことながら宿泊施設は不足しています。私も廃屋を改装したところに泊まることになりました。電気だけは通っていますが、水もなく通信手段もまったくありません。夜ともなると、蚊取り線香や殺虫剤をものともしない無数の蚊に悩まされました。マラリアの薬を飲んでいるとはいえ、やはり不安です。初日からザンベジアの洗礼を受けることになりました。

翌日での現地研修では、選挙監視要員の役割を

再確認して実務的な研修が行われ、その翌日、選挙の前日になっていよいよ配属の発表。私はケリマネを基点にヘリコプターで投票所を巡回することになりました。ゲリラ活動が最も活発だったザンベジアでは、地雷の撤去作業が充分に進んでおらず、陸路では近づくともできない地域が多いのです。

私とパートナーを組んだギニア・ビサオの軍人は、ポルトガル語しか話せないため、全て英語で行われる業務連絡を逐一通訳しなければならず大変でした。

■ ヘリコプターでの投票所回り

1994年10月27日、選挙の日がやって来ました。朝5時半に宿舎を出て空港へ。搭乗に関する注意事項の説明を受けてから、4人でヘリコプターに乗り込みました。

パイロットはＧＰＳを頼りに投票所に近づき、上空からそれらしき場所を肉眼で確認した上で着陸します。これがなかなか至難の技。密林が広がるばかりで、家が密集している町らしい場所はどこにも見当たりません。みんなで周囲をキョロキョロ見回していると、ようやく人が密集している地点に目が止まりました。

投票所は枝を組んで作った即席の小屋で、まわりには他に建物らしいものはありません。千人以上の人々はいったいどこから現れたのでしょうか？話を聞いてみると、夜明け前から何時間も歩いてきたということです。彼らがどれほど民主政治というものを理解しているかは疑問ですが、選挙に対する熱意はどこの国の人々にも負けないのではないかとさえ思いました。

投票所に入っていくと選挙委員会の5人に迎えられ、既に準備は整っていました。

午前7時。定刻どおりに投票が開始されました。まず登録者証の写真をみて本人であることを確認し、指に投票済のインクが付着していないか調べた上で、登録者番号と台帳を照合して、投票用紙を渡します。それから投票の仕方を誰にでも分かるように説明します。投票が終わると、指に3日間は落ちないというインクを付け、登録者証を返すという手順です。

選挙委員会の人はこの手順を忠実に実行していました。テーブルの横には図解入りの分厚い選挙マニュアルが置いてあり、分からないことがあると、すぐそれを開いていました。効率は悪く時間はかかりますが、投票の複雑な手順をきちんと理解し、確実に実行していました。男性、女性、それぞれ一列ずつに並び、交互に投票できるようにしてあります。男性が女性を押し退けて、混乱するのを防ぐためだということです。陽射しが強いので列は木陰に入るよう作られ、列の両側には、椰子の実が置かれていました。　太陽が傾いて影が動くと、人々はそれを追ってススーッと動き列の向きを変え、椰子の実の位置を変えるというほほえましい光景も目にしました。

■ モザンビークの人々自身の手で

今回の選挙は選挙用資材の配付を除けば、すべてモザンビークの人々の手によって行われています。彼らにとっては初めての民主的な選挙なのですが、それを感じさせないほどしっかりと組織化されており、役員も訓練されていたことは驚嘆に値します。

この日、指定されていた十数か所の投票所のうち、場所を特定できなった4か所以外をすべて回りましたが、いずれも同様、ほとんど問題なく選挙が行われていました。

1日目も同様に巡回しましたが、政治的な判断により急遽投票が1日延期されることになりました。それを知らされた選挙委員会の人々や、各政党のモニターは、3日目の給料が支払われるのか心配そうでした。彼らの顔には疲労の色がありありと表れています。選挙委員といっても決して裕福ではなく、選挙期間中は十分な水や食料もないままに仕事を続けていたのです。

10月29日の午後6時にようやく3日間の投票が終わり、ザンベジア州では電気のない投票所が大多数でしたので、開票作業は翌日の午前6時に開始することになりました。

10月30日にはモザンビークを出国しなければならず、ヘリコプター班は開票作業に立ち合うことなく南アフリカ共和国のヨハネスブルグに向かうことになってしまいました。

■ 平和への道

選挙後にできた新政府は、国家再建への道を歩みはじめました。今のところ重大なトラブルは耳にしていません。最も成功したＰＫＯの一つといえます。これは対立していた両方が強く平和を望んだ結果でしょう。世界の安定に尽力するのは、50年もの平和と発展を享受してきた日本人の責務です。そういった意味でも、今回モザンビークの平和再建を微力ながらも手伝うことができ、嬉しく思います。

阪神・淡路大震災ボランティア派遣活動を振り返って

日本青年国際交流機構の会員の中にも、様々なルートで震災後の救援活動に参加した方が沢山いました。しかし、中には「行きたいけれど、どのようにして行ったらよいかわからない」というメンバーもいるのではないかと考え、大阪IYEOと相談のうえ、ボランティア派遣の活動に取り組みました。現地に独自の受入れルートを持っていなかったので、大規模な活動とすることは出来ませんでしたが、一つの団体から継続的にしっかりしたメンバーが入ったということで、派遣先の避難所からは感謝されました。これはひとえに、ボランティアで現地に入ったメンバーが、とてもしっかりと対応して下さったことの成果です。

32名の申し出がありましたが、日程の調整がついて実際に行って下さった方は21名でした。

こうした活動を今後継続させるための基礎として記録に残すために、去る5月23日ボランティアで参加した皆さんの有志に座談会を開いてもらいました。その際に出されたお話を反省点を含めて一部紹介します。

〔良かったこと〕

* IYEOの組織としての呼びかけがなければ一人で参加することはなかったであろう。
  参加の道を開いてくれたことは大変ありがたかった。

〔反省点〕

* 参加できるという連絡がもう少し早く欲しい。
* 組織としての継続性を持たせる意味で、名札やシンボルマークなどが用意されているとよい。
* 組織としての人の継続性という良さを出すためには、申し送り方法をしっかり決めておいたほうがよい。

〔現場で感じたこと〕

* 滞在が短かったので、役にたてたのだろうかと少々不安でもあった。
* ボランティアの立場として、どの程度前に立つべきか、後ろでサポートすべきかという葛藤があった。
* ボランティアに参加した時期によって、避難所の様子がずいぶん違うので、対応の在り方も異なってくるであろう。

〔今後に向けて〕

* 一度ボランティアとして参加した人が、次はまとめ役として参加できれば、経験が活かせるし落ちついた対応も出来るだろう。
* 緊急時のボランティア体験を活かして、今後も日常的にボランティア活動の在り方などを考える会合を企画したり、情報を提供する立場になって行きたい。
* IYEOには様々な分野で活躍している人がいるので、こうした人材が活用できる体制をつくれたら良いと思う。

（文責：大橋　玲子）

兵庫県青年国際交流機構

阪神・淡路大震災で未曽有の犠牲者を出した神戸ですが、この地震のほんの2か月前には兵庫県青年国際交流機構が、東南アジア青年の船のネットワークを活用して、兵庫県のスポンサーシップのもと兵庫県の青少年団体と協力しながらインドネシア青年の受入れプログラムを行ったのです。

美しかった街、神戸が一日も早く以前の姿を取り戻すことを願って、その時のホストファミリーから原稿をいただきました。

ホームステイを引き受けて

尾　崎　富美子
（第4回青年の船）

去年のホームステイの感想を原稿にしてもらえないかとの依頼に少々戸惑いながらも、文字にしようとすることで、楽しかった思い出を思い出せたらと書いてみることにしました。

その時も感激した別れがありました。思い起こせば、私も27年前に第4回青年の船の時、ホームステイでお世話のなりました。

結婚して現在に至るまで2、3回程ホームステイのお世話をしましたが、いつも主人が「出来る範囲でお世話させてもらいなさい」と言ってくれるのですから心置きなく受入れさせてもらえることに感謝しています。

インドネシアから、視察ということで働いている方ばかり3名を10日間受入れる中で、ホームステイ3日間というプログラムでした。

3名の内一人の方は、クルージングを体験された方もいましたが、我が家はいたって平凡に、22歳の娘夫婦と孫、19歳の次女とその女友達を交えてのホームパーティーを主人の着物を着てくつろいで楽しんでもらうことから始まりました。孫の佑奈が1歳でしたので、なごやかな雰囲気を味わってもらえたと思います。

二晩好きなカラオケに連れていってあげ、アリフの得意の歌をたっぷり聞かせてもらったり、手弁当で神社巡りをしたりしました。

アリフは、30歳で独身。回教徒ですのでポークは食べられませんでしたが、どの料理も美味しいといって食べてくれました。特別なもてなしは出来ませんでしたが、日本の家庭の雰囲気は味わってもらえたと自負しています。

兵庫県主催のお別れパーティでは、アリフのギターで「愛の讃歌」を歌ったことが、昨日のことのように想い出されてきます。

アリフ達が胸に刻んで帰った神戸の街はもうありません。神戸の街の復興を願いつつ、再びホームステイを受けさせてもらえる日が一日も早く訪れますように！

人物紹介コーナー

このコーナーでは、国際交流の振興に携わる人々を紹介しています。今回は、総務庁青少年対策本部の国際交流事業を実際に担当している各係をお知らせしましょう。

国際交流第１係

国際青年育成交流（派遣・招へい）／日・中青年親善交流／日・韓青年親善交流の事業を担当、今年はアジア太平洋青年招へいも加わって、扱う分野も広く、１年中忙しい係。近藤補佐は、昨年の日韓青年親善交流派遣団の副団長。一番の古手は３年目の菊地係長。小西専門官、遠藤専門職、女性の永島係員、大脇係員の総勢６名で、45か国からの窓口となるのです。

▶

◀

国際交流第２係

「世界青年の船」の担当。現在、来年１月に出航する「第８回世界青年の船」のプログラム作りに余念がないところ。盛本補佐以下、全員が初めての担当だが、チームワークは中々のもの。とても冷静な石原係長、３係からの移動で船は２回目の石川係員、女性は韮澤係員、河野係員。ドバイで予定されている世界青年の船第２回リユニオンでは、ＯＢもお世話になります。

国際交流第３係

「東南アジア青年の船」の担当。22回を迎える歴史ある事業だが、アセアンの国も増えていく見込みなのでプログラムの工夫も課題となっている。穏やかな新井補佐を先頭に、乗船連続３回の澤田係長は、余裕の顔。センターのセミナーにも参加して下さった越田係員、沖縄出身の下地係員、やさしい姉御の清水係員。

▶

お知らせコーナー

ブロック大会のお知らせ

＊九州ブロック大会（7／29～30）長崎県長崎市
＊四国ブロック大会（10／14～15）徳島県徳島市
＊中部ブロック大会（9／9～10）三重県伊勢市
＊東北ブロック大会（10／21～22）北海道札幌市

電子メール（e-mail）のお知らせ

㈶青少年国際交流推進センターは、この度パソコン通信ニフティサーブに加入しました。

インターネットからもe-mailを送れますので、皆様からのお便りをお待ちしています。

アドレス：LDP04056＠niftyserve.or.jp

皆さんからのお便りコーナー

前略

「マクロコズム」を楽しく読んでいます。

私は、中学校で国語科を担当しているものです。3年の光村図書出版の教科書に「パール・ハーバーの授業」という随筆があります。思想的にも文学的観点からみても豊かな感動する作品です。

筆者の猪口邦子さんの思想的思考に批判的な教師は、構えて授業をしてしまいます。が、私は、素直に感受させ内容の重さも生徒たちにわからせたいと思っています。その時「国際交流の在り方について」は大変役に立ちます。

ありがとう存じます。

福岡県　永渕有季子（日本青年海外派遣49年）

編集後記

今回は、少々重量級の内容でした。読み物中心となりましたので、「字が多すぎる」と言われてしまうかなと思いながら編集していました。でも、内容は濃いものですので、ぜひ読んで下さいね。

次号は、取材、投稿中心のバラエティに富んだ企画にする予定です。皆さんからのお便りもお待ちしています。　（Y／R／S／O／K／S）

＊本誌の年間講読をご希望の方は、㈶青少年国際交流推進センターまで葉書又はＦＡＸにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM（マクロコズム）　7月号　Vol.5　1995年7月1日発行（隔月発行）

編　集：マクロコズム編集委員会
発　行：財団法人　青少年国際交流推進センター
〒103 東京都中央区日本橋人形町2－35－14
TEL　03－3249－0767
FAX　03－3639－2436

編集協力：総務庁青少年対策本部
日本青年国際交流機構
定　価：195円（本体189円）
印刷所：絢文社
TEL　03－3959－3960

1995年3月2日(木)・3日(金)、第7回世界青年の船の寄港地であるメキシコのアカプルコにおいて「第1回世界青年の船既参加青年代表者会議」が開催された。世界青年の船も第7回を数え世界54か国に千数百名の外国参加青年を生み出しており、日本とのネットワーク作りに本格的に取り組む為に、その第1歩として、日本青年国際交流機構の主催により総務庁青少年対策本部及び商船三井客船の協力を得て行われたものである。

SWY 1st Reunion in Acapulco —— 未来に向かって ——

日本を含む11か国から約60名の既参加青年が集まり、各国同窓会組織作り及びその連携について真剣に話し合った。それは「にっぽん丸」での経験の偉大さに改めて気づき、今の自分にどれほど大きな影響を与えているかを感じているからであった。1泊2日のリユニオンの間に、かつての船の体験を再現するかのように濃いプログラムを行うことができた。

第7回の団員も、すでに下船後の同窓会組織作りについて話し合っており、私たちとのコミュニケーションも十分に取ることができた。今回の成果を第1歩として、これから各国と連絡を密にし、具体的に連携組織作りに努力していかなければならない。そのためには、私たち日本青年が自覚を持って取りまとめ役になれるよう頑張ろうではないか！最後に、このような素晴らしい場をつくるに当たりご協力下さった総務庁青少年対策本部、第7回世界青年の船管理部及び商船三井客船そして「にっぽん丸」の渡辺船長とクルーの皆さんに、心より感謝申し上げます。

友岡俊博

(第5回世界青年の船ナショナルリーダー
広島県青年国際交流機構会長)

▲なつかしの「にっぽん丸」を見上げて！

世界青年の船のネットワーク作りについて▶
熱心に討議する既参加青年
(にっぽん丸、ドルフィンホールにて)

世界青年の船同窓会組織

(The Ship for World Youth Alumni Association)

第1回リユニオンに出席した既参加青年と第7回世界青年の船の団員によって「世界青年の船同窓会組織」についての原案がまとめられた。その内容は、今後の各国における組織作りの基盤とIYEOとの世界的連携体制を定めたものである。第7回団員たちも熱心な討議を重ね、国ごとに3名のキーパーソンが決められた。

その成果は、早くもエクアドルで同窓会組織が発足するという素晴らしい形となって表れた。(下記参照)

▲第7回団員各国代表者によるミーティング
(カードルームにて)

◀同窓会についての最後のミーティングの後で
(ドルフィンホールにて)

メキシコの代表▶
Adriana

▲日本の事前研修で講義する日本留学中のエクアドル既参加青年(第1回参加者)

― エクアドルに世界青年の船同窓会組織発足 ―

エクアドルでは、第7回の参加者が中心となり「世界青年の船既参加青年協会」(LA FUNDACION "PASAJE PARA EL PR OGRESO" DE EX-PY)が設立された。この協会は、世界青年の船事業に対する協力と既参加青年の交流、並びに日本とエクアドルの友好関係を更に促進することを目的としている。

5月5日には、協会の設立と世界青年の船の発展を祈念してレセプションが開催され、在エクアドル日本大使館からも塙大使を始めとして関係者が出席された。